

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦Ⅲ



平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 Ⅲ

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦Ⅲ

平成五年三月三十日 印刷

平成五年三月三十日 発行

編集 東京都文京区大塚五丁目三ノ十三
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 新日本法規出版株式会社

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉しきの念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立された。

基金法には、この目的を達成するために行うべき各種の業務が定められているが、この「平和の礎——軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦——」の作成は、その中の関係者の労苦に関する調査研究並びに関係者の労苦に関し、出版物を作成し及び頒布する業務に係るものである。

この業務の実施に当たり、基金は、平成元年度から社団法人元軍人軍属短期在職者協力協会及び軍人軍属恩欠者全国連盟に、主として次の三つの観点から従軍体験者の手記の執筆あるいは聞き取り等により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託した。

- (一) 兵役と家族状況
- (二) 軍務・戦闘と意識
- (三) 復員後の生活と家族

協会及び恩欠連では、基金からの委託に基づき、全国的に広範囲にわたり活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「恩給欠格者に係わる労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされた。

報告された労苦記録の各篇々には、中国、南方、旧満州等各地で軍務に服し、過酷な戦闘体験を始めとして

特に短期の軍務服役であるため、階級、身分の差による辛酸などの多様な労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれている。

戦争の残虐さ、残酷さ、悲惨さ、その上に無意味なものか、翻えつて平和の尊さ大切さを心に深く印し、子々孫々に語り継いでいくためには体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録は、この上なく貴重なものであり、その労苦を徒労に終らせないためにも、永く保存され周知されるべきものと認められる。

基金は、今般協会から報告された平成三年度分の労苦調査記録を基金の設立目的に照らし、その成果を基金業務報告資料として取りまとめるとともに、本資料を永遠の平和の礎として出版物として頒布することにより、平和祈念事業の一層の理解と認識を深めることに資することとした。

調査に当たられた協会及び恩欠連関係者のご努力と寄稿された多くの方々のご協力を感謝するとともに、本書が平和祈念の書として広く役立ちうるならばこれに越した喜びはない。

平成五年三月

平和祈念事業特別基金

理事長

藤井良二

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

Ⅲ

目次

まえがき

藤井 良二

第一部 労苦体験記

〔南 方〕（フィリピン）

英霊の五十回忌法要を営み、戦った

アノ戦闘の記憶を辿る

ミンダナオ戦線従軍記

ミンダナオの餓死行

〔南 方〕（ビルマ）

ビルマ

ーイラワジ川敵前決死の伝令ー

白骨街道

ビルマ通信隊

雲南ビルマ戦線撤退、終戦、復員ま

で

敗戦のビルマにて

〔南 方〕（ニューギニア）
私の戦争体験

戦争とうた

〔南 方〕（その他）

従軍と家族の状況

長い旅路

二年と十一ヵ月の大東亜戦参加

戦闘の無い戦歴

軍国一色青少年時代回想記

〔北 支〕

老河口戦記

衣師団の軍馬について

日支事変・出征従軍記録

河南作戦奮戦するも無念敗戦となる

軍隊の想い出

〔中 支〕

中支戦線従軍記

徐州戦

体験記―去る大戦を省みて―

桂林攻略戦の回想

不幸な戦争を省みる

軍国主義の渦の中の人生

白鶴舗の死闘―鞘は邪魔だ！白刃で

突入―

太平洋戦争従軍記

服従を強いられた中国四千余キロの

道のり

村上 龍夫 98

川戸庄治郎 105

中西 文次 110

宮崎 新作 113

北川 次郎 116

宮野善之丞 119

清水 敬一 125

増田 悦三 127

安江 関一 130

揚子江遡行

〔満 州〕

熱河の山で

ノモンハンからの手紙

軍隊生活七年の青春

満州・シベリヤ・北鮮の思い出

北鮮經由復員記

速射砲中隊 乗馬小隊始末記

私の初年兵時代

終戦時の関東軍第一三四師団挺進隊

の最後

鈴木 武 163

椎原 芳郎 167

小山 芳江 173

西村 安一 176

黄地 誠二 180

田中 菊治 182

木下富士男 187

新田 政之 189

白髪 昇 192

〔南 支〕

歩兵第八十五連隊南支作戦

湘桂作戦従軍記

足 跡

通信兵の想い出―湘桂に戦う―

白耶土湾敵前上陸と広東攻略

大竹 清照 135

木村 二郎 148

岩淵清之助 151

浅井 洋雄 154

草野 龜寿 157

〔海 軍〕

フィリピン ミンダナオ島敗走記

軍艦「名取」の最後

海上特攻艦隊戦艦「大和」と共に

水中特攻・戦争体験記

比島沖海空戦敗残記

渕上 熊一 207

金子 富雄 211

牧野 義美 213

本郷 三郎 217

山崎 博司 232

〔その他〕

沖繩戦四十五年目の再会

応召うら話

内田 常吉 235

秋田 守之 245

〔南 方〕（ニューギニア）

病院船撃沈さる 漂流五日間

比島・ニューギニア船舶工兵の死闘

武村 長八 280

和田 盛正 282

第二部 聴取調査記録

〔南 方〕（フィリピン）

武漢・コレヒドール攻略と比島敗退

を体験し

今の私を形成した

ミンダナオの戦場

老兵と妻

回想

小谷 輝夫 249

稲田 勇 255

伊森 正春 259

伊藤 司 263

〔南 方〕（その他）

スマトラ島の近歩五連隊勤務

ビアク島―奇跡の生還―

南方の船舶工兵、終戦後の重労働

アンボン、ケイ、セラム島 私の体

の戦後は終らない

死線での顔

南洋マリアナ孤島 バガン島の戦

ボナベ島戦記

南洋トラック諸島従軍記

補給なき孤島セラム

人間に敵味方はなし バンキナン抑

留所

島田 三郎 288

渋谷 惣作 294

山下 廣一 308

鳥井 督三 312

伊藤 光夫 317

畑岡 清 320

菅野 四郎 324

寺島 武 329

川田 一櫻 333

酒井 弘 337

〔南 方〕（ビルマ）

戦前・戦中ビルマ回顧録

ビルマの助人 狼兵団の初年兵

ビルマにおける俘虜生活

嶋森 一明 267

二場 義照 272

赤田 恒雄 278

〔北 支〕

北支での体験 石炭と兵隊

佐藤彦四郎 341

〔中 支〕

中国大陆に戦って 以德報怨

稲井田一二 346

初陣の常德作戰

浜口敬治郎 355

常德、衡陽、芷江作戰従軍記

玉木 斎吉 360

芷江作戰従軍記

大柳 弘 365

私の想い出

畑中 由松 370

〔南 支〕

湘桂撤退作戰殿軍のしんがり

大島 寅次 378

近衛兵の意気地 南支翁英作戦と慰

藤森 良 382

霊

〔満 州〕

北斗七星輝く下で

松田 馨 390

大東亜戦争従軍記 (医は仁術)

吉田 厚雄 395

〔海 軍〕

甲種予科練習生 特攻の生き残り

重政 幸雄 401

海軍航空隊 軍隊当時の思い出

中江 清則 406

空母「鳳翔」伊第一五七号潜水艦

池野 安一 412

航空・水中特攻隊と共に

ソロモン「せ号」作戰 必死の機動

高橋 義平 415

舟艇隊

コロバンガラの砲戦 第六特別陸

吉岡 光男 421

戦隊

南大東島 第三百二十三設営隊

岸川 甚一 424

〔その他〕

七カ年の軍務、銃後も苦労を共に

皿嶋 正春 429

あとがき

南方（フィリピン）

英靈の五十回忌法要を営み、戦った
アノ戦鬪の記憶を辿る

滋賀県 伴 八三

昭和十七年一月二十七日夜から二十八日の朝に至り、我が中隊がバターンの激戦で全滅に近い損害を蒙ったのである。平成三年一月二十七日この日、今ここに元比島派遣軍垣部隊九、九会で戦没英靈の五十回忌法要を京都東山霊観音でご住職様のご協力により営みました。

武運つたなく護国の桜花と散り行きし戦友諸氏のご英霊の叫びが我が胸を打ち、時既に春秋五十年の歲月

がすべてを忘却の彼方に葬り去り、今ここに懐かしの想い出となつて記憶も新たに蘇る。先ずは英靈に心からなる祈りを捧げ、法要にお世話下さった方々に感謝申上げ、戦つて来たアノ戦鬪の記憶を辿つてみたいと思います。

昭和十五年一月十日、現役兵として歓呼の声に送られて懐かしの郷土を出発し、京都伏見歩兵第九連隊に入営、基礎教育を受けました。賀陽宮殿下配属連隊の名譽と、きびしい教育の中で第一期の検閲も無事に終つてホットしたところで、「衛生兵を命ずる」との命令が出まして、歩兵より衛生部に転科し京都陸軍病院へ毎日通修衛生教育を受けることになりました。

これまでの歩兵教練とは異なり、毎日机にかじりついて勉強に励み実習も受けました。

歩兵教練では手榴彈の投擲練習ばかりでしたが、上陸演習に変わり繩梯子を下りて舟艇に移乗訓練で上陸演習が盛んに実施されました。

昭和十六年九月末、突然外泊が許されて懐かしの我家で一泊を楽しく過ごして帰隊すると、十月一日に動員令が下り応召兵の入隊の準備で忙しい毎日でした。応召兵が入隊し、九連隊は再編成されて何処に行くとも分からずに夏服の新品が支給されました。南方だと思われる。

十月五日でした。東条首相兼陸軍大臣の巡視がありまして、十六年十月十八日夜、留守隊の皆さんの見送りを受け、「身体に気を付けて元気で頑張れ」と励まされて、皆と別れを告げ、軍機保持のため各中隊別々に、（九中隊は南門より）住み馴れた藤の森の営舎を出発しました。

梅小路で軍用列車に乗車、鎧戸を下して勇躍深夜秘密裡に出発した。十九日夜明け大阪港で輸送船「平安丸」に乗船して中を見ると、上部は二段の棚で窮屈で、船倉には馬が乗っており、換気も悪く、熱気をおびて

苦痛もこの上なしの状態だった。私は指揮班に属し、皆んなで下給品を分け合ってお喋りをしながら家族以上に楽しく過ごしていた。

大阪港を後にして門司港外で投錨、十一月二十二日故国の山河とも別れを告げ、再び何処にと恵みをお祈りするのみ。十一月二十四日揚子江河口の飯田部隊長戦死の地、飯田栈橋着。部隊長殿のご冥福をお祈り致しました。

二十六日出港、二十八日に台湾基隆港到着。待機する船内で、これだけ読めば必ず勝つと言った本を一人一人に渡された。内容を見るとフィリピンに行く事がわかって来た。

十二月十七日基隆港一杯の輸送船を海軍水兵が帽子を振って応えてくれる。護送艦を頼みに大船団を組んで堂々と出て行く。一路フィリピンへと向かった。

十二月二十二日比島リンガンエンに到着、愈々敵前上陸だ。波風が荒かったが夜明前完全軍装で甲板に集結。今までお喋りばかりしていたが、だれ一人として喋る者もなかった。ただ命令を待たばかりである。海

は真つ黒で波は高そうである。うす明かりに椰子の林がぼうつと見えてきた。少しおくれたようだが命令が下り舟艇に移乗開始、繩梯子でおいて波の上下を考えながら飛び降りなければ怪我をする。上陸演習のお陰で皆な無事に移乗が終わり、舟艇は母船を離れて行く。銃声が聞こえる。激しくなってきた。第一大隊が上陸をした様子である。戦闘が開始されている。我が第三大隊は波の為に少しおくれたようである。岸の近くまで来た時におし寄せて来る高波を二、三度かぶって舟艇が沈み、飛び込んだ工兵隊の援助で全員無事に上陸に成功。敵影も無く、幸いだったが、第一、第二大隊は苦戦。応援に向かったが相当数の犠牲者が出た模様である。

目的地ナギリアンに向かって前進を始めた。細い山道を行くと突然にパンパンと銃声がした。始めて攻撃を受けたのでどうして良いか分からない。木陰に伏せた。ピュンピュンと弾が飛んで来る音がする。初めての経験で緊張をした。幸い僅かの敗残兵だったので前進を続行。やはり戦争に慣れ、弾音にも慣れないと駄

目であるという事が分かった。常夏の太陽に鉄帽が焼け付くナギリアンに到着した時は夜だった。敵影も無く無血占領で幸いでした。

夜はたばこの倉庫の中でたばこの葉の上で寝ていた事を想い出す。敵はマニラに向かったようである。南国で初めての夜明けである。東の方向に遥拝をして無事であることを祈った。

朝になると第九中隊はバギオに向かうよう命令が出ていて、第二小隊が尖兵となり出発した。途中道路が破壊されていたが、日本軍が上陸したというので敵も予定の行動をとっているようで、第二小隊が歴史的な無血入城を果たした。監禁されている日本邦人を救出したので、日の丸の旗で邦人が迎えに来てくれた時は何とも言えぬ気持ちになって涙がこぼれた。

バギオはマニラに次ぐ第二の都市である。松の木があり一面に芝生が敷きつめられて高級住宅が並び、色とりどりの住宅が点在していて絵に書いたようである。このバギオで昭和十七年の正月も平穩に迎えたのは幸運であった。

連隊はマニラに向かって前進をしていた。タルラックの激戦で上島連隊長が戦死を遂げられたと言う悪い知らせが入ってきた。バギオ方面の敵は友軍の爆撃開始と共にマニラ方面に向かったようである。バギオ市内の治安も回復、故郷を想い出す松の町とも別れを告げ、バギオ方面の警備の任を解かれ一月十八日、邦人の心からなる歓迎を受けて「バンザイバンザイ」と日の丸の旗で見送られながら本隊へ追及の命令を受けて出発した。

途中で連隊長殿が戦死を遂げられた、タルラックに立ち寄りご冥福をお祈りして、必勝の念に燃えた。バターンの戦へ昼なお暗い密林のジャングルの中を進み、道無き処に道を開きながら口でいい表すことのできない難行軍であった。漸く台地に取り付いたとたん、私から三人目におられた加藤准尉殿が狙撃を受け戦死を遂げられた。遺骨を取り、道に迷い元の道に戻ると細い小路に枯れた竹が倒れてあって、知らぬ物だからつい蹉くと何処からとも無く木の上よりバタバタと射撃を受け、密林で何も分からない負傷者が出た。応急

手当てを施して衛生隊へ送るのに何日も担架で連れて歩き気の毒であった。

そのうちに食糧も水も無くなり、乾パンを分け合い、また、夜露を受けている太い蔓を切って水筒に水を受けているが、わずかであるが何とか渴きを凌いでいた。密林の中を迷う事十日間続いたが、漸くにして谷間に出るとサラサラと清水が流れている。この水こそ恵の水である。皆が喜んで顔を付けてがぶがぶと飲んだ。これ程に水の有難さを感じたことはない。水は生命の尊さも感じました。

元氣を取り戻して漸くにして道に出ることができた。負傷者を衛生隊に送ることができたが、残念なことに出血多量にて白木の箱で中隊に帰って参りました。もう少し早ければ助かる処、誠に残念でなりません。本隊に追及すると我が第九中隊は犠牲者も僅少で最強の中隊として、敵砲弾や銃弾の雨霰の如く猛烈に落下のカポット台へと前進、十七年一月二十七日第一小隊が尖兵となりマリベレスの敵陣地に前進を開始した。真つ暗闇で何もわからない、地形も分から

ない、パターンは敵米比軍の演習場になっていて完全なる陣地が構築されている。

信号弾が上がると敵の砲弾が集中する。不気味な夜行軍である。前の者も手さぐりで進んで行く。急に停止した時バリバリと機関銃の音と共に曳光弾が目の前を走った。すぐに腹這いになって地面に伏せた。前後左右より機関銃・少銃弾で急襲、曳光弾が交差して走る。

幸い少し下がった処が窪地になっていたので伏せていた。第二小隊が迂回して一条の鉄条網をやぶり、歓声を上げて敵の陣地に突撃を開始したが、最後の拠点として必死に抵抗を試みる。陣地に屋根形の鉄条網が張っており、敵の猛射を浴びて副島少尉以下四十数名が壮烈無比なる戦死を遂げられた。多数の戦友を失い悔んでならない。負傷者も続出して手の施しようのない現況であった。

この副島小隊の犠牲により敵陣地の確認ができた。ひとまず引き下がり、負傷者を野戦病院に護送し作戦を組み替え、野戦重砲及び大隊砲の援護射撃により再

び総攻撃を開始したが、第九中隊は兵力を減少した予備隊であった。

しかし、予備隊続けと命令を受けて背囊をおろして水筒と乾パンを身に付けて腹這いになって進んで行った。夜中である。砂糖きびの焼けた匂いがする。曳光弾が頭上を飛んで行く。「ヤラレタ」と呼んでいる。近づいていったら臀部貫通であった。応急の手当を施して後方を指して下って行くように言って前進を続けていく。鉄条網があつて進めない。その場で壕を掘ることになった。幸い負傷者の円匙を持ってきたので身体の入る程度の穴が掘れ、安心と疲労により遂に眠ってしまった。

目が醒めた時太陽がカンカン照り付けていた。左右を見ると誰もいない。良く見ると深く壕を掘って入っているようである。折りを見定めて飛び込んで行った。三日三晩頑張った。後方からも連絡路を掘って乾パンを持って来てくれて有難く、感謝しながら食べました。

途中負傷したのは私の初年兵の奥村衛生兵であり無事を祈りました。また壕の中で、書間一寸頭を上げた

木ノ下上等兵が狙撃を受けて頭部貫通で戦死を遂げました。命令に依り後退することとなり、遺骨を取って後退した。

後退途中で受傷した奥村君を尋ねて見ると、後退中敵弾を受けて戦死を遂げておりました。温厚で熱心によく動いてくれて、私は片腕を取られた思いで残念で堪えられなかった。心からご冥福をお祈りすると共に奥村君の分も頑張つて行こうと決意に燃えた。

兵力も減少して戦闘の能力も無くなり、充分に遺骨を収集することもできぬまゝ、後退することとなりました。

夜中にボソボソと下りて行き補充を待つことになったが、マラリヤに下痢患者が続出した。私も下痢に罹り大北軍医殿から入院するよう言われたが、今入院をすると傷病者を見る者が無くなる何としても頑張らねばと鞭打ち、気力と精神力で克服することが出来て自分ながらに感じ入った。

バランガの警備の任を受け、バランガに向かつて行軍を続けた。バランガの町は崩壊されている。町はず

れに椰子林があつて東に川が流れていて西は道路に挟まれた所である。この林の中に壕を掘り、其の任に置いていた。

町の中央に教会があつて教会の鐘の塔が残っていたので、そこに監視兵が出ていて、町の前方に分哨が出ている中を米軍の将校が教会の下まで入り込み、監視兵に発見されて射殺されたが、この将校の勇姿には敵ながら感心しました。

バランガはバターンの入口の町なので毎日のように時を定めたように砲撃してくる。雷の如く音をたてて飛んで来る、ヒュウと前後左右に落下炸裂で壕が動く、爆風と砲弾の破片の飛び合う唸りが蜂の集団が飛んでいるような音で正に地獄であつた。幸いに林の中へは一発も落下しなかった。この中に二柱の英霊の墓標が建てられてあつた。戦友が守つていてくれたご加護の賜と心から感謝を捧げて冥福をお祈り致しました。

誠に不思議なお陰をいただきましたが、敵が進入して来た時に第三小隊長浅川少尉と今井上等兵が戦死を遂げられて惜しまれてならない。漸く補充員到着した様

子であり、安堵をしました。

再編成されて第二次バターン攻略の準備が進められていた。バランガの警備の任が解けて、再び密林の中へと行軍。バターンの山中へ前進開始、行軍を続行、密林の中を工兵隊の苦勞により東海岸から西海岸にと道路が付けられていて非常に有難い行軍でした。ドンドンと砲声が近づいた。第二次バターン攻撃は第一次とは異なり連日の飛行機の爆撃と砲撃にてサマットの陣地も崩壊されて、敵の将兵がゾクゾクと降伏して下りてきた。

食糧の不足と疲勞のためにバタバタと倒れて行く。終戦後、問題にされたサンフェルナンドの死の行軍とさわがれたが、敵、味方共に同様であつて仕方のない現状でありました、誠に氣の毒であつたと思う。

昭和十七年九月、ネグロス島のゲリラが激しくなつてきたのでバコロウドに移動することになった。ネグロス島に渡り討伐作戦に参加をした。この島は砂糖の産地で見渡す限り砂糖きび畑が続いている。ラカロウタセントラルの精糖工場の警備に付いて土囊の代わり

に砂糖の袋を使用。内地では砂糖も無くて困っているだろうにと誠にもつたない氣がしていた。

次第にゲリラも少なくなつてきたので、住民がボツボツと帰つて来るようになって、医療機関も無くなり「スモルドクトル」と言つて近づいてくる。治療もしてやり、親しくなり、現地の米で餅をついたり、椰子の花からとれるお酒。一寸甘口でいける。「トバ」と言っているが飲んだり歌つたりまた踊つたりして平和が蘇つてきた。

ネグロス島の討伐が終わるとセブ島セブ市に移動。セブ島は山ばかりで段々畑になつていてバインナップが多く栽培されてあつた。長芋が多くあつて、掘つてきてはトロロ芋にして良く食した。セブ島の討伐は夜襲攻撃ばかりであつた。薄暮を利用して出て行つた討伐である。椰子の葉蔭から月の光が流れてきて南十字星が輝く夜、通信隊が二名配属されていた。たまたまニッパハウスの一軒家があつた。其の中で交信を始めていた。「ヤラレタ」と叫び声で救助に行き、近づいて見ると、腹部首貫で残念にもすでに命が絶えてい